

日本書紀傳 廿八卷上

和 一〇五二二 號

九十

| | | | |
|------|------------|-------|---|
| 内閣文庫 | | | |
| 番號 | 和 | 10522 | |
| 冊數 | 156 (99) | | |
| 函號 | 特 | 85 | 1 |

内閣文庫



文庫印

日本書紀傳

第五

日本書紀傳二十八之卷

神代卷二十六

寶劍出現章

穗積重胤

謹撰

書曰素戔嗚尊曰韓鄉之

嶋是有金銀若使吾兒所御

之國不有浮寶未是佳也乃

拔鬚鬣散之即成叔又拔散

日本書紀傳二十八

〇一

内一二六八三號

胸毛是成檜尻毛是成披眉
毛是成櫟樟已而定其當用
乃稱之曰杖及櫟樟此兩樹
者可以爲浮寶櫓可以爲瑞
宮之材披可以爲顯見蒼生

奥津葉戸將臥之具夫須噉
八十木種皆能播生于時素
我鳴尊之子號曰五十猛命
妹大屋津姬命次抓津姬命
凡此三神亦能分布木種

奉^{マツリ}渡^{ワタシ}於^ニ紀^キ伊^ノ國^ノ也^ヲ

素戔嗚大神其御子五十猛神以下三柱神を率て天降
り御在し坐ける御事ハ先の一書ハ素戔嗚尊所行無
狀故諸神科以千座置戸而逐逐之是時素戔嗚尊帥其
子帥五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處と有る
是あり然して此大八洲國ハ歸赴らせ御在し坐ける
事ハ其下ハ初五十猛神天降之時多將樹種而下然不
殖韓地盡以持歸遂始自筑紫凡大八洲國之内莫不播
殖而成青山焉と有る是して此時ハ其上文ハ乃興言

曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡と有り是即
先の神逐ハれの御時ハ天降り御在し坐ける御間の
較略あり又右の文ハ盡以持歸と有ハ盡以持往せ給
ひし御事の御在し坐ける文を略りれし證して其出
立て往渡らせ給へりし本土ハ即此大八洲國ありけ
れハあり此を以て寶鏡開始章第三一書ハ既而諸神
嘖素戔嗚尊曰汝所行甚無頼故不可往於天上亦不可
居於葦原中國宜急適於底根之國乃共逐降去于時霖
也素戔嗚尊結束青草以爲笠蓑而乞宿於諸神衆神曰
汝是躬行濁惡而見逐謫者如何乞宿於我遂同距之是

以風雨雖甚不得留休而辛苦降矣と有ハ天上より此
大八洲國ハ天降レセ給ヒ國內の衆神ハ距レれさせ
給ヒテ韓地ハ渡往坐レシハ彼土ハ直ハ降到レセ
御在レ坐ケルハ有ベクザリケルハ予思を
定めて常ハ云事アリ右ハ引ル文ハ遂以埴土作舟乘
之東渡少ク句を切テ次ハ到出
雲國ハ天降レセ給ヘハ後度の事少ク此ハ東渡
有ハ下ハ盡以持歸始自筑紫云々ト有ハ相應ク所
有レケル事著リケレハ其間ハ在レ事迹ハ傳ヒ
テ然多シ續ケル者ト所思レキを以テ彼此見合ス
ハ此少ク直ハ出雲國ハ物爲させ給ふトシテハ事
語ヒテ事實を貫故此ハ素戔嗚尊曰韓郷之島是有金
銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也略の御言

ハハ此地少ク詔出させ給ヘク韓地ハ坐す間の
御言擧ルハ先其實地を定めて後ハ其説ハ及ぶ可
キアリ若彼地ハ御在レ坐テ此御言を擧させ御在
坐セシムハ居於韓郷之島曰此國則是有金銀云云
ト書ズル可キ所アルハ此ハ韓郷之島の下ハ者の辞
を添テ讀習ヘクハ此大八洲國ハ御在レ坐テ古此國
ハ未金銀の出ザリツル其ハ對ヘテ詔給ハセシ御
有テ彼ハ渡す可ク船の事を汰汰爲させ給ヘク
更ハ論ヒ無ク多シ有ケルハ此大八洲國ハ歸渡

御在坐つゝも其始新羅國小降到給ひ曾尸茂梨
地小御在坐間小已く金銀有事を隨小見認させ御在坐けり御
事を所思し出させ給ひて更小吾兒所御之國小召上
させ御在坐むとの御結構ある事申奉るも更あり
仲哀天皇八年御紀熊襲討給ふ時の神託小愈茲國而有寶國譬如美
女之祿有向津國疎此云麻用彈枳眼炎之金銀彩色多在其國
是謂枋衾新羅國焉若能祭吾者則曾不血又其國必自
服矣と有る此神託の出る基本此小在る事あり但神
代を去て此御世小至りて漸小此の結有て始て金銀
を寄奉給へふハ有べくず吾兒所御之國不有浮

寶者未是佳也と詔給へるを以見此ハ打置ずして直
小其浮寶載て彼國の金銀を此小令取給ひしありけり傳十五三百八十
七六十五丁小注るが如く謂ゆ三女神の金銀を掌御在
し坐す謂ひと申し又出雲風土記島根郡加賀神崎の
下小佐太大神所坐也御祖神魂命御子の産生る所小支佐加比比賣命岩屋
哉詔金弓以射時光加ニ明也故云加ニと有る更あり
神武天皇戊午年御紀小乃有金色靈鷲飛來止于皇弓
引其鷲光暉煜狀如流電と有る仲哀天皇以前の事多ふ已く當昔黄金と物有
けりハあり若己く其黄金無土ツル筒長ふとの出来りてりハ何を以て然
物の譬として傳ふる事を得てり然れハ彼ハ人地

此小育奉事の絶たし
成てい彼は更小神託有て彼を令伐給へりし者

て其ハ素茅鳴大神の御心より出たりと申さむル強

説ハ非る可又出雲風土記國引文ハ所以號意

立出雲國者狹布之推國哉初國小所作故將作縫詔而

持衾志羅紀乃三埼與國之餘有耶見者國之餘有詔

而童女胸鈕所取而大魚之支太衝別而波多須支穂

振別而三身之細打挂而霜黑葛闇節耶爾河船之毛

曾呂爾國來引來縫國者自去豆打絶而八

穂米支豆支乃御埼也有ハ如ク此素茅鳴大神

ハ如ク彼國を引來給へりハ何許の御事ハ

を渡し金銀を令採給へりハ何許の御事ハ

御在坐然るを此ハ浮寶の御事を詔給へり

云め説共ハ神代の事實小 儲又此ハ乃拔鬚散之

明るくも非ぬ言立おふし 即成扱又拔散胸毛是成摺尻毛是成披眉毛是成據樟

己而定其當用略中夫須噉八十木種皆能播生于時素茅

鳴尊之子號曰五十猛命妹大屋津姬命次梳津姬命凡

此三神亦能分布木種と見えたる此神業を爲させ給

へりし地を先明しめ奉るすしてハ心ハ浮たる所有

て其説定まり難う故此大神の其三神を帥て新羅

國より歸渡させ御在坐て其初て著せ給ひけり地

ハ即紀伊國在田郡須佐神社名神大月あり可き小就

て其謂れを此小求む可き事傳二十二二百九二十三

五丁又三百二十七三十小注るが如し然る小紀國神

社録小此神在昔住大和國芳野郡西川峯地移于此國

伊國少て有し故事ふして彼吾兒所御之國不有浮竇
 未是佳也と詔給ひ旋させ給へり御政も紀伊國小
 住せ御在し坐^{初たり}間の御政ふあむ御在し坐けし然
 吉野郡ある西川峯地へ更ふり在田郡須佐御名草
 郡須佐神戸ふと何れも神代の御迹ある事申すも
 更ふり古事記小本國之大屋毘古神と神有ハ五十猛
 神小御在し坐ふる小大穴牟遲神を御父大神の御許
 小奉^城城内小御在し坐ける御事を明くの奉り知べき者
 あり^ハ傳^ハ二十^ハ七^ハ注^ハせるが如く紀伊國と云号
 ハ謂ゆる五十猛神を伊大神と申奉る其神の樹種を
 播殖させ給へる小因る事あるか此素戔嗚大神の然
 る樹種を始て物爲させ給へる小起りたる可し^ハ借其

△謂ゆる吉野山中
 小朝鮮嶽と云ふ有
 小韓國の傍り御在
 坐間所由有る
 地ありて元韓國
 嶽ありと云ふハ
 此也

△皇仁天皇三年
 御紀小更都於纏向
 是謂珠城宮也景
 行天皇四年御紀
 更都於纏向是謂
 日代宮と見え

髮鬚を抜散し給へる御故事をハ紀伊國を本小爲て
 此邊を探索る小其杖の始て生立りしハ吉野ある可
 し此山の材を吉野杖と云て世小名高きとへ有る小東
 小隣りて伊勢國度會郡の川上小大杖山の名有る由
 有げあり^ハ檜^ハ公^ハ万^ハ葉^ハ比^ハ五^ハ小^ハ卷^ハ向^ハ之^ハ檜^ハ原^ハを^ハ訓^ハる^ハ就^ハて
 思ふ小珠城ハ玉木して玉松玉椿あとの例小檜を美
 たり言あり日代ハ檜代りて苗代あとの代^シ是あり若
 て此地の^{纏向}檜原ハ假字して蒔茂と云事小て右の並小
 古之^人殖兼杖と訓し佐豆人之弓月我高^ル荷とも有
 る其を七^五小^ハ卷^ハ向^ハ之^ハ由^ハ擬^ハ我^ハ高^ハ仁^ハと^ハ有^ハて^ハ共^ハ小^ハ同^ハ所^ハふ

るか三月十五日此趣五百観ふ可て可古小並無山山林少て有けるあり神

名式小大和國城上郡穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗

大已貴神小渡せ給へる小對ひて穴師大兵主神社

ハ御父大神小御在し坐べき事申する更あり若て時

茂モウの茂モウハ應神天皇二十二年御紀小茅草モウシヤク薈蔚モウシヤク三代實

録十三ハ小五穀モウシヤク茂モウシヤク豐トヨク四十九ニ十ニ小五穀モウシヤク茂モウシヤク盛セキにあと

有を以て見る小纏向の名の此時の古事小依れりけ

む事を明くむ可く又卷向坐若御魂神社大月次相御

在し坐ふ得去ましき由縁あり所見なりける披ハ

紀伊國伊都郡高野山此始あり可し神名式小謂ゆる

丹都比女神社名神大月此御社の事ハ傳九三十一小注九十一

奉るが一宮正一位勲八等丹生津比賣大神二宮正一

位高野御子大神三宮氣比大神四宮嚴島大神小坐し

其二宮ハ即天野神して高野山の地主神小坐が故

小山僧此御神を崇敬し奉る時ハ大小御崇を受

くと多む儲其高野山中深林中ハ十本本禰と云て一根

小して十株も叢り生たるが有を空弘法大師海が求間持法を

行へりし時の瓶花を其任小地ハ株なりつる小根を

生して繁茂せり凡て滿山禰の一種殊小所を得て枝

葉美ハしければ世人此を高野禰と云ふと云り上古

乾道七世之胤子
 爲六世孫將之武
 神と有(り)二柱御
 祖神の胤子也事
 御事とも違(り)ず
 全鎮將之云神と
 事も中(に)由有(り)常世
 宮と有(り)二柱御
 氏神とも申(す)と外國
 を延(び)給(ふ)神の謂(ひ)
 ると思(は)可(し)次(に)

の神異を多くハ彼法師小託事傳二十七七十云
 る例も有(れ)右の予本鎮の事ハ此大神の此小始て
 被を生(れ)給(ふ)あどの古傳有(て)云出(た)り者ハこ
 う若(し)高野御子神ハ其五十猛神ハ御在(り)坐(す)ハ式ハ
 山城國愛宕郡出雲高野神社と有(て)出雲と冠奉(る)ハ
 出雲神子と申(す)謂(は)る可(く)又御崇(め)の一速(く)御在(り)
 坐(す)も似著(り)又此神の猛(と)高野の高(と)相近(き)
 をも思(は)可(く)又此山の地主と申(す)ハ謂(は)る紀伊大
 神とて渡(り)せ給(ふ)可(く)あど考合(す)可(し)偕(し)又當社正
 應(應)六年の太政官符ハ社者豐受大神関之瑞籙也

云事の有(り)初(て)樹種の成出(る)時ハ有(り)けぬハ其神
 の祐奉(る)せ給(ひ)けむ事右の卷向社の御事ハ合(は)せ
 曉(さ)る可(し)據樟ハ別(れ)小思(は)寄(る)事ハ無(れ)ども神名式ハ
 出(た)る和泉國和泉郡楠本神社坐(す)大鳥郡石津太社
 神社の傳(は)蛭子神天磐據樟舩ハ乘(り)順風ハ放(た)れ
 此舩艦(は)とて石津浦ハ著(る)故(に)石津と云(ふ)其舩
 の著(る)所ハ石津岩山と云(ふ)と有(る)蛭兒の事ハ更(に)小
 此小由無(き)事アツ此(こ)つ彼浮寶ハ造(る)せ給(ひ)あど爲(し)け
 む古傳の片端あど有(て)云(ふ)も但(し)石津太社神社
ハ傳(は)二十卷二
 百十丁ハ注(る)が如(く)姓氏録和泉國神別天孫ハ
 石津連天穗日命十四世孫野見宿禰之後也と有(る)是

あり俗に石津の戎社と申す。蛭兒神の事と爲て傳はるる可。其天穗日命の御子を天夷鳥命と申す。夷字を延昆須と訓。其より轉して蛭兒神と云る。少て其ハ云ハル足ぬ事あか。右の天磐楸樟船の事ハ楠本神社ハ由有リ又神名式ハ出たり。淡路國津名郡石屋神社今宮屋浦と云ハ御在。坐事傳十五卷六十五下ハ注。如ク今俗ハ磐楸樟大明神と申せ。其南西ハ隣リて楠本村と云有る事。右の和泉郡楠本神社有ハ並びて淡路神社御在。坐ル由有けり。や。諸此和泉國ハ素戔嗚大神の御子大年神以下の神等多く御在。坐事傳二十六卷附録ハ書せるを猶和泉風土記ハ和泉郡山直郷有神号山直明神大足彦忍代別天皇御宇所祭神須佐能雄尊也。有ハ式ハ謂ゆ。山直神社是あり。又其二百六十九丁二十七卷六十九丁の細書ハ云。大鳥郡大鳥神社歟。靱ハ風土記ハ古老傳云昔素戔嗚尊御子衝捍等字而留古命巡行此國詔吾御休衰坐詔而靜坐故云於登利今謂大鳥者記也。云此ハ五十猛神ハ所思。由有て注せる。ふハ考合す可。又古事記高津宮段ハ兎寸河之西有。一高樹ハ有ハ和名板御名ハ大鳥郡常凌。あるを

も思ふ可。右の如く素戔嗚大神の杖檜楸樟を始てさ者あり。右の如く素戔嗚大神の杖檜楸樟を始て生。給へるハ隣國ハ且る事あり。然所思。立せさせ御在。坐ける地あり。其國ハ有ければ即紀伊國と云号ハ出來れり。者あり。若て其樹種を分布。給へり。三神の本城。又其國ハ有故。小紀伊大神と稱奉る上ハ猶更ある御事あり。諸此小大神の樹種を始給ふ御政有て下。凡此三神亦能分布。木種と有ハ御父大神より其種子を賜り奉せ給ひて播殖させ給へる。少て第四一書ハ初五十猛神天降之時多將樹種而下。然不殖。韓地盡以持歸。始自筑

紫凡大八洲之内莫不播殖而成青山焉と有る如く其
天上より將下りて給へるをり國土して御父大神の
化出給へる樹種を併せて共小播殖て大八洲國を
青山とい成し給へりし事申すも更ふりり其己
小傳二十七五十引る纂疏小右の樹種の事々樹種
可樹藝草木之種子也諸穀諸菜諸果實桑麻等在此中
蓋備饑寒衣食之用器財之用下所謂官舍等是也と有
か如くして中より桑麻等ハ天上の御物ありと此紀
伊國して始殖させ給へりて見えて和名枚都郡名紀伊
國伊都郷名小伊都郡桑原と有る養蠶の事を三神此

小起して國土小傳へさせ給へるありけり万葉七十九
下小足代過而縲鹿乃山之と有る此ハ在田郡ありと
も由有る中昔の歌小此山を詠るも多在るを皆縲
云ふ縁語を引たるのこして更小古を考ふ可き便
無きを夫木抄仲正の歌小五月雨ハ糸鹿の里の曳糸眉
も絶むと為りや曝す日も無きと詠る當昔猶此して
養蠶の事ハ物爲つる状あり又郡賀郡小今有る郷名
小麻生津郷と云有る若古よりの名ありしハ得去
るまじ故有る事小但麻の事ハ傳二十六卷二
出雲風土記小大原郡高麻山郡家正化一十里二百歩
高一丈周五里云々古老傳云神須佐能袁命御子青

幡佐草昭命是山上麻蔭初故云高麻山即此山峰坐其
御魂也云魁事有此麻生津の地名あどハ
引出べも非れども右の纂疏の御説の甚床さハ
就て然もや思ふ心遺りの試ふ云の諸和名抄郡
名ハ伊豫國桑村久波羊良大隅國桑原久波良と有
ふとも若くハ菟紫より紀伊ハ到給へり御道次ふ
れハ此ト同ト所諸此ハ鬚髪を抜て諸の樹種を化
以ふとの有ふり出給へり其御事ハ起ハも己く天上ハて芽ハ初
てあむ有ける其ハ傳十九五百六十九丁二十一百九十九丁二十二
二百九ハ注カ如く寶鏡閑始章有る神逐の以前ハ
其被具を徴り申され事を云る中小至使被髮以贖
其罪亦曰被手足之ハ贖之其第二一書ハ是以有手端
吉棄物定端ハ棄物亦以唾爲白和幣以洩爲青和幣第

三、一書ハ以手爪爲吉爪棄物以足爪爲凶爪棄物と見
え古事記ハ亦切鬚及手足爪令被而神夜良比夜良
比岐と有る右の以唾爲白和幣以洩爲青和幣と有る
爲字ハ化字の義ハて穀麻の更ハ此ハ化出たる准ハ
ひハ手足爪より各化出たり物有べく又髮鬚よ
りハ其干置置戸ハ用カ被柱の化出たるハて此ハ
謂ゆる杖檜等の木共成出たり事の有ハ依て此大
神の神逐ハれて天降り御在ハ坐ける後ハ其以前ハ
天上ハて然る事共の御在ハ坐ける御幸心を思えて
此ハ至りて物爲させ給へるハ御在ハ坐へる諸大

神の如此く樹種を製出給ひ御子五十猛神を以て播
殖しめ給ひ大八洲國を青山と成させ給ひ御消息
ハ傳二十七ハ十ハ己小季ハ十ハ注ハ十ハ奉ハ十ハ如ハ十ハ算ハ十ハ疏
ハ進雄尊之暴行使青山變枯於是得青山也ハ有ハ十其
意ハ以て先ハ天津罪を天上以て犯させ給へるを今
此ハ至りて其過を補ハせ給へるふれハ唯樹種を分
布しして青山と成し給へるのハ思成し奉る可
くす此一事を以てり萬の御行の有功ハ御有狀を
あむ見奉る知べりけり其ハ四神出生章第十一
ハ注ハ奉るハ如く此大神の初ハ保食神ハ事御在
坐りて以て降彼衣食住の物實を損ハせ給ふハハ

ハ以て右の天上の解除ハ事起りて其ハ保食
神の御功を幽登りて國土人民ハ衣食住の事を幸ハ給
ふハ御外の御事御在ハ坐りて由ハ擲御氣野命ハ
奉る御名を以てハ著明ハ御事あり傳二十三卷三百
ハ復ハふ此一書中の御較略ハハハ第ハ一書
ハ有る敷川上以前の御事ハ並びて共ハ此大神の先度
の御天降の故事ありと云ハ慥ハ有る據ハ己ハ條ハ小
ハ云ハふを此ハ吾兒所御之國と詔給へるハ上章第ハ一
書ハ所見たる後の御辞見の所ハ請御照臨天國自可
平安且若ハ以清心所生兒等亦奉於母ハ申奉ハせ給へ
る御兒以て即後ハ皇御孫尊を天降ハ奉ハせ給ハハ
御事を量り豫ハ以て詔ハ出ハせ給へる御言あり御天

降ふころハ出雲國ハ住著セ御在リ坐テ后神をも娶
給ヒ御兒大己貴神をも令生給ヘリけれ此時ハ天
より帥テ天降給フ五十猛神等の三神御在リけれト
ル其御兒等の御事を指テ吾兒所御之國トハ詔ふ
トキ御事ふれば皇御孫尊を指セ給ヘリあり是即御
天降ハ先後有テ此御政ハ其先度ふる一證あり又此
小髮鬚を投散させ給ヒテ杖檜披椽樟等の木種世小
始テ出來ぬ事云ル更あり然るハ傳云三十九年三百年ハ敷川上の件ハ正
書ハハ松栢生於背上ト有る栢ハ檜の一名あり古事
記ハ亦其身生蘿及檜楡ト有テ其趣相同ト云ふあり然

れども敷川上ハ天降り御在リ坐テ直ハ大蛇を退治
させ給フ御事の御在リ坐セバ何時の程ハ其木種
を化出させ給フ御暇の御在リ坐む縦ヤ此時ハ其御
事を行ヒ御在リ坐とも其樹大蛇の背上ハ生立迄ハ
ハ如何ハ行渡る可キ彼莫不播殖而成青山焉ト有テ
後ありずトハ然る事の有べりトハ非ぬ者をや
然れハ木種を播殖給ヘる事ハ先度ハ在テ敷川上ハ
御天降ハ後度ある事著明キ者ありけり常ハ御天降
此ハ叢勝ト云を如何ト思ふ人も有るハ此ハ前
度後度の事を委トク明トメ知づる時ハ此大神の御
事跡を慥ト見認奉る事能ハぶるか故ハ思を深めて
考得たる説あり猶下

事を記し續ぐを合せ見てよる。○韓御之島ハ私記ハ加良久ホ乃之万之有リ即第四一書ハ謂ゆる韓地是アリ偕此韓地ハハ唐上天竺と接ける荒西の東頭ハ在て別ハ孤島ハ非リければ此の御言ハ韓御之島と詔給へるハ就て考可キ旨有ける其ハ傳六百五十七五十八丁ハ注せるガ如ク八洲起元章第一一書ハ謂ゆる蛭兒淡洲と二有る其蛭兒ハハ東北の大荒外ハ在る諸部の始アリ淡洲ハ西南ハ在る諸戎を云て韓地も其部内の一域有る物アリ其正書ハ處ニ小島皆潮沫凝成者其亦曰水沫凝而成也と有る潮沫ハ凝成

れる中ハハ當昔漸クハ韓地の始て成れるものハハ唐土アリ未地形を成さざりける程ハ獨韓地の断離れたる如クハ別ハ一島と謂つ可キ状アリ故ハ然詔^給へりける者ト云テ所思えなれ上代ハハ秋津島磯城島などの如ク水の巡れる中ハハ此ハ其ハハ別ハ未荒西ハ地脈接りずして一孤島ありし時ハ古傳ハ有ければ押並たる例ハハ等しくあり。偕十四二十丁ハ注るか如ク葦原中國と云ハ天上ハ對して此大地の全を云る古名有る物々其ハ小寶鏡開始章迄有るハ此大八洲國の称号有るガ如ク其ハ其第三一書ハ素戔嗚尊を逐ひ奉りし諸

神の語小故不可住於天上亦不可居於葦原宜急適於
底根之國乃共逐降去之有也此時其韓地さへ未
國形を成ざりし程の事ふれは如此云て大地に住給
ふ事を禁止め奉りて其地下に在る黃泉に逐奉りし
あり然るも其續き此大神の天降り御在し坐し時衆神の
同小距きて留休め奉りざりし其時ふむ韓地小
ハ流離ハれ御在し坐たるを其地ハ距奉る神ハ非
りハ故小終小曾尸茂梨の處に御在し坐し著せ給
ひけり此時漸くハ彼地の出來初たりし證ハ此大神
を建邦之神と申し五十猛神を韓國伊太氏神と申す

おて著明き事あり若此より以前小彼國の全く成整
たむハ建邦と云ハ徒事小非ずや欽明天皇十六
年御紀蕪我卿して百濟國に仰下さるの給へる言小
昔在天皇大泊瀬之世汝國爲高麗所逼危甚累卵於是
天皇命神祇伯敬受策於神祇祝者迺託神語報曰屈諸
建邦之神往救將亡之主當國家靜謐靖人物入安由
是請神往救所以社稷安寧原夫建邦神者天地剖判之
代草木言語之時自天降來造立國家之神也頃聞汝國
輟而不祀方今後悔前過脩理神宮奉祭神靈國可昌盛
汝當莫忘之有也通證ハ此專指素戔嗚尊也事見神代

紀云此玉勝間列ニ椿卷あり此文を引て云此言
何れの國何れの時あり且りて甚尊き諭あり自天
降來造立國家之神とハ須佐之男命あり可一神代御
卷ハ彼命韓國小天降坐一由見えたりと云れたる實
然る言あり傳二十三 百八十九丁ニ 注せるが如
く此大神の此後至りて御父母二柱御祖神より事依
一奉らせ給へる滄海原潮之八百重を悉く造立さ
せ御在一坐るあり少縁の御事小御在一坐ざるを今
ハ漸く小韓地のミ万國の中少て國形を成せりけれ
ハ此程の事ハ未万國の全を係て云べきハ非るか

然して右の文の中少由是請神往救所以社稷安寧
と有る神ハ此大御國の内ハ御在一坐す素戔嗚大神
の御靈を此より勸請れりあり此を以て此皇大御國
ハ神祇の本域あり故ハ彼土を始とて諸蕃
の地ハ功成し坐る神等と雖も此ハ歸り御在一坐
す可き謂れ有る事を知べりあり己小第四一書小乃
興言曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡と有て
樹種の事ハ不殖韓地盡以持歸と有り今此一書ハ
ハ韓地の金銀を此ハ合採給ハむ神策の御在一坐る
あり此地ハ其天神の御在一坐て彼美を此ハ引寄せ

御在り坐ふが有けり又傳二十六卷八十九下小注社注進狀大己貴命少彦名命小坐す由云るを此第六一書其後又彦名命行坐熊野之御碕遠適於常世郷英と見え同記引る此の天孫降臨章の文小大己貴神の國避の文小長隱常世郷者英と有る此即二神を合せて韓神申奉る所以あるを其れ彼國小ハ留あり竟させ給ハずして彼齋衛三年實録小湯人云我は大奈母知少此古奈命也昔造此國訖去往東海今為濟民更亦來歸と有か如く如何ふる神と申せども事有る時ハ彼渡給ひ事訖てハ此小歸り御在り坐を以て此大八洲國ハ諸神の本域ある事を知べき者 儲此小韓郷之島と有る下小者の辞を附て讀來あり 此大八洲國小己小歸渡させ御在り坐下後小其以前小彼地ハ渡り御在り坐たり間ハ其國の消息を見行り御在り坐て更小語り出させ給へる御

言ふり然して此御言をハ此時小誰少ハ宣ひ出させ給ふ此小出たる五十猛命以下の三神小告させ給へる事決くあむ有けり其ハ彼金銀を皇御孫尊の所知坐させ御在り坐す大御國の珍寶成し奉らせ給ふとして先浮寶無てハ佳くくと宣言て即髮鬚を抜散して樹種を成し出させ御在り坐て其樹種を分布り給ふ御事をハ右の三神小委任させ給へる以て知り儲金銀ハ此大八洲國小ころハ先有ぬ可き事あり却りて彼地小始て出たり事ハ其程彼潮沫の凝りて成れり事盛小在りハ自然小金

銀の凝成る事も盛なりと所見たり且金銀の國
土の根幹あり有れば此を漫りお穿ち取る時ハ國
土の體其爲お勞れ地勢の弱りと成る事あり有け
れば此大八洲國ありハ地中お收て此を採しめ草
木ハ大地の毛髮あり此大八洲國よりハ僅お毛髮を
以て浮寶お爲り渡して彼土の根幹を此お引寄せ奉
給らふむ必此おハ深く思慮せ給へる御旨有る事
と測奉り知らるる事あり
其金銀の鹽氣お凝成りし事
ハ或書お水土の能其質を調
和する所おハ風火の氣ル亦能此お含蓄りて鹽氣凌
りり土質を凝結す其最堅固なる物ハ硬石おして地
体の骨幹あり若て其巖石中お含む所の鹽氣數多の
年序を経るの間お地中の靈氣を醸成し其精華を發

する所お至てハ珠玉と成り寶石と成り又其凝固の
極堅なるハ金銀と成り銅鐵と成り其精の流歴する
ハ鐘乳と成り石髓と成ると云るハ謂ゆる窮理家の
説ありと云る此お相協へる故お引出す諸此大神の御
事を彼垂加流の葦共金氣の神なりと云るハ謂ゆる
五行配當の事説わいて云ふも足ざる事本よりあり
然るお傳十九卷九十五丁二十一卷二十六丁お注せ
るお如く風火金水土の五神御在し坐て万物を結成
し給ふ中お風火二神ハ伊弉諾大神お屬て天照太神
お從奉り金水土三神ハ伊弉冉大神お屬て素戔鳴尊
お從奉りて互にお其御治を仰ぎ奉る甚く奇しく妙
ある理有る事あり此意を得て此の文を味ふる時ハ
大お其味ふる事あり是有金銀の是字訓べらるる私記ハ
深りゆける
此四字古お波金銀安留志摩奈里と有り金澤本の
訓も然おれらるる上の韓國^御之島お者の辞有れば然ハ
訓べらるるを若其者の辞のを去て大小意味の違

あむ出来め、儲當昔彼地、小金銀有、事八仲哀天皇
八年御紀、小詔群臣以議討熊襲時有神託、皇后而誨曰、天皇何憂
熊襲之不服、是濟之空國也、豈足舉兵伐乎、愈茲國而有
寶國、譬如美女之賂、有向津國、賂此之麻、用彈枳眼炎之金銀、彩
色多在其國、是謂拵衾新羅國焉、若能祭吾者、則曾不血
刃、及其國必自服、其有是、是あり己、小素戔鳴大神の此
時、浮寶を作、給ひて彼國の金銀を運取、給へ
り、事神代、ハ常ありけむ、を人代と成て、ヨリ以來
彼國の通ひ絶た、リ故、ハ此御諭、ハ御在、ハ坐け、ハ
め、此事神功、皇后元年御紀、ハ於是神託、皇后曰、中略則

新羅國を得給へ
る事、於是皇后
曰、初、兼、神、教、一、時
授、金、銀、之、國、ハ、有
ハ、更、あり

如美女之賂、而金銀多之、眼炎國、以授御孫、尊と見え、古
事記、ハ西方有國、金銀爲本、目之、炎耀種、ハ珍寶多在
其國、吾今歸賜其國、ハ見え、顯宗天皇元年御紀、ハ小金銀
蕃國武烈天皇前紀、ハ誕生銀、ハ郷と有、ハ是あり、貢獻、ハ
推古天皇十三年御紀、ハ是時高麗國大興王、聞日本
國、天皇造佛像、ハ黃金三百兩、皇極天皇元年御紀、ハ遣
諸大夫、難波、ハ高麗國所貢金銀等、并其獻物、天武天
皇八年御紀、ハ新羅遣阿食、ハ金項那、ハ沙食、ハ薩、ハ菓、ハ生、ハ朝、ハ貢、ハ也
調物、ハ金、ハ銀、ハ鐵、ハ鼎、ハ錦、ハ布、ハ皮、ハ馬、ハ狗、ハ騾、ハ駝、ハ之、ハ類、ハ十種、ハ亦、ハ別、ハ獻、ハ物
天皇、ハ后、ハ太子、ハ貢、ハ金、ハ銀、ハ刀、ハ旗、ハ之、ハ類、ハ各有、ハ數、ハ又、ハ其、ハ十年、ハ小、ハ新

羅遣沙喙一吉食金忠平大奈未金壹世貢調金銀銅鐵
 錦絹鹿皮細布之類各有數別獻天皇二后太子金銀錦
 霞幡皮之類各有數又朱鳥元年小新羅進調從筑紫貢
 上細馬一疋騾一頭犬二狗鏤金器及金銀霞錦綾羅虎
 豹皮及藥物之類并百餘種亦智祥健勳等別獻物金銀
 霞錦綾羅金器屏風鞍皮絹布藥物之類各六十餘種略
 と有あは皆韓郷之島より金銀を貢上りし迹是あり
 又金銀と云ずしては神功皇后四十六年御紀ハ百濟
 國王の此の大御使ハ申せし言ハ便復関寶藏以示諸
 珍異曰吾國多有是珍寶欲貢貴國略と有り此珍寶

左草和名ハ金屑
 陶景注云作屑
 謂之生金
 陶景注云建世
 亦有生金一名
 大具砂一名黄金
 陶景注云古
 舊名金屑
 日之精也
 古加祢出陸奥國

云即金銀ふる事右小引る共を見て明し可し又
 の金銀蕃國と云小並びて神良天皇御紀ハ寶國と云
 小神語見え又神功皇后前紀ハ以爲知所崇之神欲來
 財寶也國ハ祈之曰朕西欲求財國ハ有ハ更あり右
 小引る銀御をも多加良能久述と訓る共ハ金銀之國
 所ハ金銀を以て寶國と云小事あり思ひ誤る事勿
 礼 ○金ハ古賀祢と訓べし和名抄ハ金爾雅云黄金謂
 之湯其美者謂之鏤即紫磨金也說文云銑和名古金之
 最有光澤也見之文金屑陶隱居曰金屑一名生金乃復利之都と有る是あり万葉十八二十小久我祢可
 毛多能之氣久安良牟登と有ハ却ハ音の轉あり可し
 孝徳天皇前紀ハ練金を古麻我祢と訓之釋秘訓ハ
 古那我祢と有り續紀ハ獲黄金獻之練金一分沙金一

分と並云る其練金ハ熟銅ふと云ふ同く熟成たる
金を云ふれば右の如く古那我祢といふ云ふ可^シ若
て右の古麻我祢ハ其沙金ありし時の祢^シて其沙金
小本より粉金と云名の有けるは是即金を古我祢
と云事の本ある可^シ然して五色の黄ル此金色より
出たるは此字音を取れるハ非る事云ル更ふり
然れば黄金ハ沙^カ金^ガより出黄色ル亦其色より出
たり祢^シ事著明き者あり然るハ黄の字音よ
り取れると思ふハ僻^シめりといふべし五色の中ハ青赤
白黒の言有て黄色ハ其名無くして争でハ物色を
辨ふる事を得てむ甚^ク若て其黄金と云物ハ天地
と推ふと僻^シ心ありむ
開闢の初より有て未其實を顯^スるはありけり

本朝事始和琴條小上古天津神樂奏令加奈止美乃命
制也と有る此時の事を神祇本源小書せるハ即高幡
上金鷄居因以象故名之鷄琴也^{今世号和琴是也}と所見たる
即金鷄とい照暖きて黄金の色ある鷄を云は此程小
物ハ比^レ云を以見れば己ハ當昔黄^金と云物の有る事
を知べし傳^{其ハ}十九^{三百三十三}ハ云るを此ハ天上少ての御
事あれば別^シして此顯國少て金銀を見出給へるふ
む此素琴鳴尊ハ御在^リ坐ける此時浮寶を作り
物爲させ給へれば打置ずして直^釋小^釋地より此小取
せ給へりけり出雲風土記ハ島根郡加賀郷郡家

北西二十四里一百六十步佐太大神所坐也御祖神魂
命御子支佐加比比賣命（屋）岩哉詔金弓以射時照加二
明也故云加三と有を鐵弓に見ては齋む事あれども
照加三明也の語有を見れば猶金弓ある方勝れり付
り其加賀神埼の下小又金弓箭流出来と有る此を以
て素戔嗚大神より以降此國少ては韓地より渡りて
多小此物の有し事知る又神武天皇戊午年御紀小
乃有金色靈鷲飛來止于皇弓弭其鷲光暉煜狀如流電
と有る右の金鷲と同一く其色小譬へ傳れられたるか
り其御世小此物を所知者ざらむ小ハ金色靈鷲ハ

此事下三下小
銅の事ハ注す
所ハ云り考す
可

云べくも非りけり者をや當昔猶神代小渡來し金銀
の世傳りて物ハ比へ云詩り美たき寶物賞玩也り程を見る可其ハ
上代小ハ此國小無り物ありを續紀小和銅元年春
正月乙巳武藏國秩父郡獻和銅有て年号を改れ
たる程の奇事あり其神武天皇戊午年御紀
小山高尾張邑有赤銅八十梟帥と有る此已小赤銅を
以て其祐と爲然れどもル金銀ハ唯美たき寶と爲て齋
くの（ハ）と有けれ世小遍ねく用うる事少てハ非
りけむを右二十小擧るが如く神の御託因て彼寶
國を授り御在し坐りり以降御世ニハ貢獻の物
と成て再神代の舊儀小復りて今度ハ此方より浮寶
を渡りて令採給ふ勞無く彼より八十船の貢と共小

奉る事、成れるハ神代ハ彼未人種無キ故ハ此
方より令採め今ハ酋長も出来國民の蓄息ハ
ハ即貢奉る可キ自然の道理あるゾ
秘府略曰應神天皇(五年)五月武内宿禰博士和珥吉
師等議曰自先朝外國所貢金銀及諸寶貨已多充満于
府庫宜以金銀造貨幣罷用寶玉許之同十八年用玉莫
止ト有テ左ハ謹案所藏銀幣三十枚其内外有文磨滅
不可辨但金幣闕之ト有即神功皇后御世ハ奉る所
の寶を以テ幣ハ作り用ひさせ給ふ始是なり此より
以前ハ寶玉を以テ幣ト爲させ給ひ來る事懿德天

皇二年よりの例ある由傳十七五十一ハ注る如くあれ
ハ此御世より並べ用ひしれなりけし宣化天皇
二年御紀詔曰食者天下之本也黄金万貫不可療飢白玉
千箱何能救冷ト有ハ右の金銀と珠玉との事を並詔
へるあり此程已く寶貨を玩ぶ事の大小過たるを操
て天下ハ詔言給へり
然れども其用ある
所の金銀ハ皆韓卿より貢奉るるを用ひさせ給へる
あり己ハ顯宗天皇二年御紀ハ歲比登稔百姓殷富楮
解銀錢一文ト有を見れハ愈常昔貨幣の事行ハれ
ありけり前朝安閑天皇御世ハ大小農事を起させ給
へるか故ハ其大御心を御心ト爲さし若て其神功皇后
せ給ひて詔ひ出たる大御命ハこころ
御世より以降彼三韓より貢奉る金銀を以て珍寶ト

天平十一年二月
陸奥國始貢
黄金

即神名不見えたる
苗郡黄金山神社南
是より傳(五)五條小
寺(注)せり
可(注)あり

あむ為さむ御在し坐けり如何ありて彼國不絶
て此大御國小其金銀共小出來る事とハ成りたり續
紀天平勝寶元年夏四月甲午朔幸東大寺に有る其時
の詔小此大倭國者天地開闢以來_ル黄金_波人國_用獻
言_波在_モ斯地者無物_止念_部流_能聞者食國中_能東方陸
奥國守從五位上百濟王敬福_伊部内小田郡_仁黄金出
在_矣豆_獻と有て其寶國として召給ふ百濟王の子孫
あり一人の始て見出て奉れりあむ甚く奇く妙ふ
る神量の御在し坐る爲ふりけり_ハ鈴屋大人の解小
此黄金の出たる事ハ天平廿一年二月陸奥國始貢黄

金於是奉幣以告畿内七道諸社と有る是あり若て同
四月丁未ハ天平感寶改元有る此黄金の出たる
小因てあり偕同月乙卯陸奥守從三位百濟王敬福貢
黄金九百兩と有る始て貢りたる後小又貢りたる小
也此ハ此詔より後の事あり万葉十八_{二十}ハ大伴家
持宿禰の賀陸奥國出金詔書長歌有る此度の事あり
其歌ハ之伎麻世流四方國ハ波山河乎比呂美守都美
等多豆麻豆流御調寶河可蕪倍衣受都久之毛可祢都
之加礼騰母吾大王能毛呂比登乎伊射奈比多麻比善
事乎波自米多麻比豆久我祢可毛多能之氣安良牟登

於母保之豆之多奈夜麻須尔鷄鳴東國能美知能久乃
小田在山尔金有等麻宇之多麻敵礼御心乎安吉良米
多麻比天地乃神相安比宇豆奈比皇御祖乃御璽多須
氣豆遠代尔可三里之許登平朕御世尔安良波之豆安
礼婆御食國波左可延年物能等可年奈我良於毛保之
賣之豆略其反歌小須賣吕伎能御代佐可延年等阿頭
麻奈流美知能久夜麻尔金花佐久と有り抑黄金の事
此より以前文武天皇の御世大寶元年尔陸奥國尔
入を遣りて治金しむる事見えたりしと云り成る
りしあり可し又同年對馬より出せる事見えたり

ど詐欺ありし由所見たり儲此天平二十一年の後ハ
續きて出たりと見え勝寶四年二月陸奥國調庸者
多賀以北諸郡令輸黄金其法正下四人一兩と有り以
神と有りて通えたり右の金花佐久と云ハ謂ゆる金
意ハ有て山中土塊の時ハ金氣盛ハ在る時ハ必其韻外
ハ發出るを花ハ准ハ云と聞ハ此詞を取て云ハ
可し宇治拾遺物語ハ佐渡國ハこハ黄金の花咲た
る所ハ有ハ云ハ云ハ万葉十六卷ハ吾身一ハ七
重花佐久ハ重花生跡白賞尼白賞尼と有ハ如ク此
凡て物ハ榮有て出来る事ハ花佐久と云リ此ハ
リ後ハ續紀ハ天平勝寶二年三月戊申戊戌從五位下
猶原造東人等於部内廬原郡多胡浦濱獲黄金獻之於
是東人等賜勤臣姓と有れども餘國ハ出るハ稀との

事少^{當昔}て專出^{當昔}るハ陸奥國ありと見えて本草和名小
此黄金の事の出陸奥國と有る是あり續後紀小兼
和二年二月丙子朔戊戌下野國武茂神奉授從五位下
此神坐採沙金之山と有る始として處こ小沙金の出
る山ハ上世より多りりげふれども山を穿ちて握取^採
る事ハ彼國のこありと見えて漢籍宋史あり東奥
州産黄金と云事所見たり右の武茂神ハ神名式小郡
須郡建武山神社と有る是あり然る小和名抄郷名小
茂武也作るハ倒反せるあり式社考小今武部村と云
小御在^ハ坐て所祭素戔鳴尊ある由なるハ此の傳小

合れハ實也然る可し若て同式小對馬島上縣郡那須
加美乃金子神社有ハ那須神之金子神と申す事少て
傳十七^{六十}五^十下^十小注せる如く筑後國神名帳小御并郡從
五位上宗形金己呂神と申す御名も御在^ハ坐せば其
三女神を金子神と申奉りしむり知べしず皆上件
注せる狀小神代小韓地ハ金銀有る事を見認させ給
ひて其爲小浮寶を作りて令採給ひ其事人代と成て
より以來已小絶なりしハ韓地^歸を順つめて彼地
より梳鞭の朝貢と共小運輸して令獻給ひ又彼地の
朝貢漸絶る頃をひし至りてハ右の如く此皇大御國

小出始りて年小月小増て多くあむ成れりけり其
 程より彼小絶て後小此（此は餘りて後）渡す許あ成小なる
 あり此小奇く壘く城ありとも妙ありけり。坐
 深き致有べき御事ありけり。但神代小此の金銀を
 遠く韓地小浮寶を渡して令採らるる程の神量御在
 一坐す御事あれは彼より貢ず成し後小此の用も備
 あり小ハ皇神等の亮給ふ所ありめども如何も餘有
 けりとして此の金銀を渡す事ハ神慮の程も甚く可畏
 き御事ありけり小松内大臣の使宋國小黄金三千兩
 を渡し給ひしるど人皆彼公の徳を称すめりども
 此公の於てハ甚く失策と云べし近來外國の交易
 頻りに行われし以降彼小渡す者幾許や俗士奸高の
 國力を殺す事歎くあり飽足す事ふらむ下十
 下合せて銅の事を注して委く之を考
 合す可き者なり。○銀ハ本草和名小銀屑一名白銀陶景注云
銀名白銀

△三韓の朝貢より
 以前の事あり小
 已銀ハ二目の有
 神代以來彼より
 取寄て渡す爲に
 給ふるが爲あり

黄銀蕪敬注云又有黄
黄銀本草不載 銀屑者月之精也和名之呂加祢
 出對馬國と見え和名抄小尔雅云白金謂之銀其美者
 謂之鏐和名之
路加祢 又銀屑陶隱居曰銀屑一名銀蕪和名銀
乃須利
 久古事記曰宮殿小銀王と云ふまの御名と見えたり 有る是あり万葉五ハハ銀母金母玉母奈尔世武
 都ハハ尔麻佐礼留多可良古尔斯迦米夜母神樂採物歌大力
 云す志呂ありし證是あり若て韓郷を金銀之國又金
 銀蕃國と云ひ又御世ハハ相並へて貢奉れりし事
 跡ハ已二十
一ハ擧げらるが如く但武烈天皇前紀ハ銀郷ネカラシ

傳五三傳七十七
小女神の全限を主
り坐しんふを

えたる御間山ハ和名抄郷名小宇和郡三間美萬有る
是あり己小傳十八九十七小注せる如く景行天皇四年
御紀小國乳別皇子是水沼別之始祖也と有ハ瑞珠盟
約章第三一書小謂ゆる三女神の御事（小就て）此筑紫
水沼君祭神是也と有て筑後國三潯郡の事あるを天
皇本紀小國乳別命を伊與宇和別祖と有を以見る小
右の御間山大小由有ハ此小白銀の出る（事實）故
有る事ありける（思）諸右小鉚（アツク）と有ハ私記師説未練白銀
也と有る是（思）僕（アツク）とあり如く住たる伍の金（思）云
（義）冠辞考小新撰万葉集小荒金之土之下丹手

古今集序小荒金の地ふ（思）云々（思）有を引れて頭
書小荒金ハ生たる任の金てふ意ありと云れたる其
如く（思）生たる任の金ハ土塊の如くある者あるを
（但此荒金ハ此小白銀のありとも凡て小直の事ハ更あり）
云あり（思）諸右小引る如く本草和名小白銀を出對馬國
と有て後ハ次茅小多く成れり（思）あり漢籍宋史百
九十九卷小東奥州産黄金西洲島出白銀以爲貢賦と
有を以て對馬（思）出る事
の古盛あり（思）知べ
○金銀小亞小銅鐵有り鐵
の事ハ己小傳二十六十小注せるを銅の事を未云（思）
る小因て今注して（思）諸本草和名小赤銅屑と有て訓
を漏せるを醫心方小和名安加ニ赤と有を取て補ふ
可（思）和名抄小銅説文云銅（思）和名阿赤金也と有り諸此

銅ハ古語拾遺石窟段尺取天香山銅以鑄日像之鏡、
有れとル古事記ハ取天金山之鐵而略令作鏡と有
る此正説めて銅ハ唯後世の鏡を以て加祚云事不當なること有け
れ實ハ此時の御鏡ハ鐵ありければ更ハ據難
き事傳二十六丁十ハ注るか如ク然れとル此ハ素戔嗚
大神の浮寶を造らせ給へる後ハ韓郷より金銀ハ亞
てハ此銅をとり召給ひて神代より以降此ハ豊々
ありけりと見えて神武天皇戊午年御紀ハ高尾張邑
有赤銅八十島帥と有り其物無クハ何を以て赤銅、
ハ号く可くむ秘庫器録ハ秘府略曰崇神天皇六十

五年六月任那國遺使貢漢珍六億万枚請不老不死藥
草謹案今所藏九百八十枚漢室錢也文曰半兩或曰五
銖皆小篆文と有る是皇華ハ銅錢有の始あり御紀ハ
同年秋七月任那國遺蘇那曷叱知今朝貢也と有る此
時の貢物ある可ク同録ハ秘府略曰反正天皇二年五
月木菟宿祢大前宿祢議如漢室新造銅幣通方孔著銘
文將施行天下詔許之至是始作此珍止用寶玉也用大
足公私便之謹案所藏五十一枚四方傍有文如卍字耳
と有る是皇國ハ銅錢を鑄させ給へる始あり征
韓以來己ハ金銀の貢絶ざりければ銅を其と共に共ハ

奉り又銅錢を貢奉しるゝふ其の擬ハせ御在坐
て此の鑄錢の御事を起させ給へるありけり天皇
十二年御紀自今以後必用銅錢莫用銀錢云々有
て此程より愈盛成以て來け秘庫器録鑄
錢司記日持統天皇八年三月直廣肆大宅朝臣麻呂勤
大貳督忌寸八島黃文連本實等并鑄錢司長官文武天
皇三年十二月直大肆中臣朝臣意美麻呂并鑄錢司長
官令鑄銅錢之有此項鑄錢司を置し由あり
儲銅の皇大御國出初る事ハ元明天皇御紀和銅
元年春正月乙巳武藏國扶父郡獻和銅之有是あり
其時の詔書聞省食國中乃東方武藏國亦自然作成
和銅出在止奏而獻焉此物者天生神地坐祇乃相宇豆
奈奉福波信奉事依而顯又出多寶在羅之止神隨所
地奈奉福波信奉事依而顯又出多寶在羅之止神隨所

念行須是以天地之神乃顯奉瑞寶依而御世年號改
賜換賜波久詔命予衆聞宣故改慶雲五年而和銅元年
爲而御世年號止定賜之所見乃鈴屋大人の解和
銅ハ尔伎阿加賀祢也訓べ伎清音あり此ハ謂ゆ
熟銅あり可し熟字ル尔伎之訓リ儲此ハ自然に有れ
ハ始より熟銅出て出たるふて其が奇珍きしん々々あり
と有りて通えたり神名式武藏國兒玉郡金佐奈神
社名神之有る是を和銅の當時ハ未秩夫郡あり有
一ありけり清和天皇實錄貞觀四年六月四日辛丑
武藏國正六位上金佐奈神列於官社同八月丁酉朔六

日壬寅授武藏國正六位上金佐奈神從五位下と有り
今も中仙道ある本莊驛の西端に金佐奈村と云ふ御
在カチガハ坐して金鑽大明神と申す社説なり祭神ハ素戔嗚大神
坐して社の後小金華山と云有て大なる巖に銅を穿
取たる穴今現に存すと云ふ儲此社の祭神を素戔嗚
大神と申す事實に謂れ有る者ありて此ハ神代に韓
地より金銀をのり今採給ふ御事議御在坐けり狀
ふれども右に云ふか如く上世に赤銅の事を以て
八十島帥が採とも成せるを思ひてり知る事ふ
り又上ナ引る御紀に金銀銅共韓郷より貢奉

此の御世の迹を以てり著明き事ありし若て
金佐奈と申すハ金實カナサネと云事ありて凡て摠カサネ金の物實ふ
る謂ふり儲黄金ハ沙金より出るふむ本あれども
鐵を除きてハ白銀以下共赤銅中カサネ會カサネよるを鞆
分て銀も錫も鉛も品を定むる者ふれば右等
を攝ね合せて金の本体ハ銅ハ有ければ其謂
此に因てず金實ハ云ふありける又西洋人の説ハ銅
を鞆別て取る事ありと云ふハ例の偽ある由人皆知
此の事ふれば今云限ふ非ずと雖も然る法の必無し
と云難き者あり然る時ハ銅ハ諸金を相兼たる者
ありて金銀以下ハ銅より生る物と云べくふむ有
ければ實ハ諸金の物儲此素戔嗚大神高天原より天
實と云ふべけれ

降^リ御在^リ坐^スより以來天神御子の大御食國之所
知食む此大八洲國を可美國の宜^ク御國^ノ齋^ヒ鎮
固めさせ御在^リ坐^スむと所思^ハ成^テ此^ハ謂^ユる毛
髪を拔散^シて樹種と成^シ給^ヘるハ^此地^ノ毛髪を生
給^ヘるあり又金銀を此^ハ今採給^ハずして外國よ
り運^ヒ令取給^ハ御事量を爲させ給^ヘるハ^此地^ノ骨
幹を強くして國力を耗^シ給^ハずして御心^ハ坐^シ後
小國引坐神^ニ祿奉^リて彼^ハ有餘^ヲを取^リて國を縫
足^ハ作成^シて海陸の形勢を整^サせ給^ヘるハ^此地^ノ血肉
を調和させ給^ハ御政是^ハふり然^レハ金銀銅を^レ此

大御國の中^ニ穿^テ取^ル事^ハ本^{ヨリ}御心^ハあ^ラざる故
小神功皇后小神託^シて金銀之國^ノ韓^郷を事依^リ奉
りせ給^ヒて彼^{ヨリ}貢獻^ス所^ヲを以^テ國用^ヲを利^シ給^ヒ
來^ル世^ハ治^ル革^ルりて漸^ク其貢^ヲを絶^ハ至^リてハ金銀銅
共^ハ一時^ハ夥^ク出^ル來^ル事^ト成^テ彼^ハ其物^ヲ盡^ス
其國^ヲ亡^ス至^ルる^ハ至^ルる^ハ甚^ク可^ク畏^ク天^ノ遣^ハハ所
見^タりける斯^ク由縁^有る事^{あり}故^ハ其神慮^ヲを可
畏^ク奉^リせ彼御在^リ坐^スて遠天皇神の御世^ニハ
金銀銅を夷狄^ニ渡^シて國上^ヲを空耗^シて爲^サせ給^ハ
御事^ハ絶^テ御在^リ坐^スぬ御國^ヲ格^ハる^ハ武家^ハ政^ヲ申^ス

此一以降彼小臣（結して親一王を以て封せしめて其を申さし）御國體を辱め奉る將軍さへ小有ける程の事ありければ其乱末小至りて大内大友ふどの輩私小船を渡して交易を物爲つれば金銀銅の渡りて再復さざる者幾十億と云敷を知らずあむ有べき慶長元和の頃より世の乱治りて愛なく榮えける御世あり其弊風を逐て猶致させ給ふ事能はず刺へ小蠻船の交易年々繁く奸商の賣買日小夥しく成以て來りて奇器淫巧の玩物異禽怪獸の諸種能毒難（辨）の藥物の類古より聖皇賢君の惡ませ給ふ所の物ありて害有て益無き品小易て我が骨幹と有

る金銀銅を渡して國力を衰ゆる事を然りと歎愁ふる心無きハ天下（万世）の損益ハ抱えず自一家をば小豊饒ありて僞傲り上を押へ下を愚くして其世其時の宜しきを是（コレ）爲る奸吏の心より起りて賊商の手小成る事小て淺きと云何と云小絶たる禍事ありけり彼天平勝寶元年ハ陸奥國（守）同百濟王敬福ハ僅小黄金九百兩を得て獻れるす從五位下より直小從三位小仕れさ此（其）を賞する御政の御在り坐さハ此を罰する御制無きころ天下の大ある欽典と云べりけり（或書ハ新井君美説とし）後光明天皇正保四年より東山天皇寶永四年まで凡六十四年の間ハ長崎一所

より外國へ出し金銀銅の大敷を積算するは金二百三十九万七千六百兩余銀三十七万四千二百九十貫目余銅一億一千四百四十万八千七百斤あり又右の外へ後陽成天皇慶長六年より以來中國西國の浦へ小蠻舶來り自由の商賣せし時不取行し所日敷又御朱印船として我國の高入共年々外國へ至り商賣せし時不持行し所の敷又薩摩より琉球へ出し所の敷及對馬より朝鮮へ出し所の敷又長崎を始として所々の奸商共援荷の高賣し出し所の敷等を余程引入たる算法を以て其概略を積るは金七百十九万二千八百兩余銀百十三万二千六百二十七貫目余銅二億二万二千八百九十九万七千四百斤余右ハ慶長六年より寶永五年迄凡百八年の間我國の金銀銅外國へ流入して再回する所の敷あり右より以來我國少く金銀銅の出し事ハ東照神君の御時より盛なりハ無し又外國の例を聞かず其夥しき金銀銅も慶長六年より今百年及びびぬるが年々の交易ハ若干を失ふ事あれハ又百年の後ハ我國用の金銀銅も乏しく成べしと云りと亀井道載と云人の十策と云ふ載たるを今用有る所のを採出せり其實寶永六年

己丑より此安政六年己未迄凡百五十一年の間ハ外國へ渡り失ふ敷ハ又右ハ何倍ありと知べしと云ざるを今年より許して猶四夷ハ蠻の交易を始する事あれハ此後の事想像可し此より絹布糸綿ハ更ふり紙蠟漆器の類の上下貴賤共小日ハ小用ふる物を渡されて蠻産の毛織ハ易へ無用の玩器ハ易事誰ら此を快しと爲む自後の困窮又想像可し上ハ朝廷を輕蔑しめ奉り神祇を蔑如し奉りて國を胡俗ハ易事豈痛悼しと云ふと云ふ天下ハ吾兒所御之心有る人誰ら此を快と思ふ可き ○吾兒所御之國ハ纂疏ハ吾兒指吾勝尊當主於此國也と有か如し其ハ傳十五 三百 二十二 三百三 小注ハ明るめ奉るか如く瑞珠盟約章ハ此尊の日神ハ申給へる誓約の御言ハ如吾所生是女者則可以爲有濁心若是男者則可以爲有清心と申させ給ひて成坐る御子ハ果して男

御子をあむ生奉らせ給へりける故其第一一書小故
素戔嗚尊既得勝驗於是日神方知素戔嗚尊固無惡心
と見え又其第二一書小其素戔嗚尊所生之兒皆己男
矣故日神方知素戔嗚尊元有赤心と所見たり此小正
書小是時天照太神勅曰原其物根則八坂瓊之五百箇
御統者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而子養焉
又勅曰其十握劍者是素戔嗚尊物也故此三女神是悉
是尔兒便授之素戔嗚尊と見えたる此ハ谷川翁説小
夫根系統脉在父而不在母如五男則日神猶父也素尊
猶母也と云れたるが如くして其始素戔嗚大神の御

子小ハ御在ー坐せし物根の方より推す時ハ猶天
照太神の御方あむ主と御在ー坐す御事あるが故小
主張して申す時ハ何方迄ル日神の御子かて渡らせ
給へりけり故是を以て天孫降臨章小天照太神之子
正哉吾勝ニ速日天忍穗耳尊と見え其第一一書小ハ
天照太神勅天推彦曰豐葦原中國是吾兒可王之國也
略中因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王
之地也宜尔皇孫就而治焉行其寶祚之隆當與天壤無
壤窮者矣と有ふ此御心の御言あむ數知ず多うり
けり是ハ天照太神の御子と申奉る所以を明し奉れ
るあり諸右ハ引る物根の御事ハ古事記ハ於

是天照太御神告速須佐之男命是後所生五柱男子者
物實因我物所成故自吾子也先所生之三柱女子者物
實因沙物所成故乃汝子也如此詔別也之見えたり但
五男三女神の物根の御事ハ紀記共ハ誤有て男神を
瓊より女神を劔より化出坐る趣ありハ大ハ違へる
事より其第ニ一書ハ瓊より三女神劔より五男神の
成出させ給へるあり正説ありハ右ハ引る正書あり
詔別の御言をも其心して見奉り知り辨り可りりけ
る然して右の物根を以て詔別させ給へる御事の御
在し坐しより以降天照太神の御兒と爲て其五男神
を崇養し奉らせ給へる程ころ有けれ素戔鳴尊其勝
進の御荒び共御在し坐けれハ日神御赫怒坐て天石
窟ハ刺隠らせ御在し坐けれハ就て諸神此ハ因て祈
申されけれハ終ハ出させ御在し坐けれハ是を以て諸

神罪過を素戔鳴尊ハ歸て子座置戸の解除を負せて
神逐ひハ逐降し奉らせ給ひけれハ其御子五十猛神
を帥て大八洲國を盡ハ青山と成し給ひ又此ハ韓御
之島是有金銀若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳
也之詔給ひて此度ハ其御兒の御爲ハ悉ハ判用と成
る事共を定めさせ給ひて此度ハ實の御辞見ハ參上
らせ給ひけれハ即上章第一一書ハ是後素戔鳴尊曰諸
神逐我我今當永去如何不與我姊相見而擅自徑去歟
迺復扇天扇國上詣于天略於是素戔鳴尊白曰神曰吾
所以更昇來者衆神處我以根國今當就去若不與姊

相見終不能忍離故實以清心復上來耳今則奉觀已訖
當隨衆神之意自此永歸根國矣請妣照臨天國自可平
安且吾以清心所生兒等亦奉於妣已而復還降焉有
是少て此ハ先小日神の物根の御事小因て吾兒也
と詔給へる御命を兼て其素戔嗚（畏まり）を今茲小至りて申
させ給へる少て其より已く素戔嗚大神の此ハ吾兒
所御之國と詔給へるを見れば此頭國小天降一奉
せ給ひむ御事量ハ己小素戔嗚大神の御心小出來始
りたる御事少て有けり右ハ中略と書せる所ハ其五
男三女神を其再昇天の此時
小生出大給へる由小書されたりと雖も其ハ先の昇
天の時の御事の此ハ混れ出たる誤るれば今云ふ限

小非るあり然して此ハ五男神を日神小奉り給ひ
三女神を帥て御在坐して今度ハ出雲國簸川上小天
降り給へる即予ハ常小謂ゆる後の御天降の御時ある者あり 諸此天忍穗耳尊以
下五男神ハ一も天照太神素戔嗚尊二柱の珍御子と
御在坐して此天下を所知者す御事の起原少縁の由
緒ハ非るあり己小四神出生章小既而伊弉諾尊伊
弉册尊共議曰吾己生大八洲國及山川草木何不生天
下之主者歟於是共生日神號大日靈貴略中次生素戔嗚
尊と有て此時小生坐る珍御子ハ此二大神小て渡り
せ給へる 小天照太神ハ日神と御在坐して天上を所
知者せ給ふ可神隨ある由縁少心御在坐ければ

唯素戔嗚尊が天下の王者と傳づるにせ給ふ可き
事の運成りたるに其第六一書素戔嗚尊者
可以治天下也と有る如き小に至りし其始
小天下の王者を不生めり」と詔言給へりし御事の
御在り坐ける御事也因りけむ素戔嗚尊の御上
りて天下の王者と成りせ御在り坐べし御心あり
御在り坐ざりければ後小御母國へ赴らせ御在り坐
むと所思り成て恒小啼泣給へるを以て終小御父大
神小逐われさせ御在り坐ける即日神小辭して罷
むと宣ひて天上小參上らせ給ひける時ころ有けれ

日神の御方あり得去りし御疑共の御在り坐け
るが爲小誓約の御事小及ばせ御在り坐ければ日神
の御物根を賜はりし男御子ハ成一奉らせ給ひける
斯れハ此男御子ハ天照太神ハ素戔嗚尊ハ御兒
小御在り坐る故小互小吾兒と詔給へるあむ甚其
謂れ有る御事ありける此小於て其初二柱御祖神の
何生^不天下之王者歟と詔給へりし御言の結びハ成
れる者ありて實小妙ありとれ妙ありける事の趣あり
けり此御事ハ神代紀中の甚止事無き大節ありて惣て
小直り要と有る説あり予此小大ハ發くる所有
て己小傳ハ卷より始りて次其件ハ就て言痛き迄
論ひ云る事あり有れり此小更ハ言樂せず

してハ意の徹る心ち 儲右小引る^{上章}第三一書ある
爲るを以て更ハ云事あり 素戔鳴尊の御言小吾以清心所生兒等亦奉於妣と申
給へるハ即吾所知む天下國土を奉於妣と申させ
給へる義ありて其先ハ誓約の御中小成一奉らせ給へ
る男御子を日神小奉らせ給ひて即天照太神の御子
と爲て此食國天下を授奉らせ給ひて御事を裏^{シタ}
請奉らせ給へるみて右小引る天孫降臨章第一一書
小天照太神の大御心と豐葦原中國是吾兒可王之地
也と詔給へる御言の起るむ此小起れる事己小傳二
十三^{二百十}小注一奉るか如し儲此小吾兒所御之國
五丁

と詔給へるハ其初度小天降り御在り坐ける間の御
事あるや往々天照太神の太子と爲て天降り所知
令坐奉らせ給ひむと所思す下の御心御在り坐か故
小大八洲國を青垣山美しく作り装ふ給ひ外蕃ハ
未地形も未備るざる時あれば其最前ハ成れる韓郷
之島を皇國小附屬給ひふと千名の五百名小功り
御功績を成りて天上小再参上らせ給ひ右の御言を
懇切小日神小聞え奉らせ給ひ三女神を賜りて出雲
國小天降りせ御在り坐て彼吾御心者安平成と詔給
へる御言も其御事を果して詔ひ出たる物と見え猶

彼大蛇を退治給ひて神劍を得させ給へる時なり是
神劍也吾何敢私以安乎乃上獻於天神也と有て是即
素戔鳴尊の御璽と爲て日神より令賜給ひしむ爲小
奉らせ給へるふゆ其時小奇指田姬命を娶て大己貴
命を令生給へるも其天神御子の御爲小國土を經營
奉らせ給ひむ御心めて此程より亦御名を八束水臣
津野命と申して國引の御事を物爲させ給へるハ本
より天神御子の御爲小外蕃を取て皇國を善成し給
へる御所爲あり皇太神宮祈年月次等祭詞ハ遠國者
八十綱打掛氏引寄如事と有ル其國引の故事を取

して皇太神の御言ハ出たる御事ハ右の吾以清
心所生兒等亦奉於姊と申させ給へる時ハ其天神御
子を降して天下の王者と成し奉らせ給ひむ御事ハ
豫て此二大神の神議小議定めさせ給へるありけり
故此小吾兒所御國と詔給へる御言ハ究めて幽深
き致有るるハ然れハ此始引るが如く纂疏小吾兒
指吾勝尊當主於此國也と注し給へる
ハ實ハ然る御説あり次小云指大己貴神也と有ハ
甘ふ難し口訣ハ吾兒者言孰兒乎忍穗耳尊已爲
天照太神兒是時大己貴尊未生唯兒可居之謂予と云
るふどハ殊小深く思ひ者あり又白井宗因
説小此兒と云るハ五十猛神あり可し素戔鳴尊新羅
小降給ひての御詞と所見たり金銀ハ有ハハ木無
き程小植て用ハ亮むこの事あり日本ハ伊特諾尊
の治め給ふ時ハ句ハ逆智神有る時ハ我國の事ハ

今五十二布祿等
米五字伎祿等詞
都追

非りあり所御之國ハ新羅ありと云るありハ殊更ハ
知き説して云ふも足さる者あり凡て神學者と云輩
の文義ハ暗き事如此
豈悪まざる可きや
○浮寶ハ船を祿美たる御言ハ
て浮ハ八洲起元章ハ謂ゆる天浮橋の浮是あり其ハ
空中ハ浮へる物此ハ海上ハ浮へる物あり故ハ共
小此言有り此第六一書ハ以白藪皮爲舟以鷓鴣羽爲
衣隨潮水以浮到と見え應神天皇九年御紀ハ從船
と云事ハ浮海の字を當れ万葉九二十五丁ハ上瀬ル珠
橋渡之下瀬ル船浮居七三十ハ布勢能字弥ル布祿
字氣須惠底於伎幣許藝邊ハ已伎見礼婆二十三十
小由布之保ル船字氣須惠安佐奈藝ル倍年氣許我

年等又三十八丁奈ル波都ル船字氣須惠夜蕪加奴伎可
百登ニ能倍氏安佐婢良伎和波已藝泥奴等伊幣ル都
氣已曾と有り又船ハ云ふれども一二十二丁ハ真木佐
苦檜乃孀字字物乃布能八十氏河ル玉藻成浮倍流礼
其字取登散和久御民モ家忘身モ多奈不知鴨自物水
尔浮居而二十有ハ筏小乗る人を云ふあり七十六丁ハ小鳥自
物海ニ浮居而又二十浪高之奈何掬取水取之浮宿也
應爲猶哉可榜十五六ハ小海原ル字伎祿世武夜者又十
丁可母自毛能字伎祿字復礼婆ふハ船の事ハ云る
あり又十三卷長歌ハ隱來笑長谷之河者浦無蚊船之
依不來磯無蚊海部之釣不爲と云て反歌ハ邪波

礼浪浮而流長谷河可依磯之無蚊不怜也之有九一首
を味ふるハ浮而流ハ船の事を云ふ其外ハ水鳥
あハ寄テ浮宿ト云事を詠る此彼有ト雖ハ其ハ
心の落著ぬ由ハ云ふハ此ハ別ハありト知ベ
寶ハ傳十七三珍寶の下小注せるカ如く高ツカ在ル
甚く其物を美メて尊トと愛クるハ義あり彼珍寶瑞寶
の類ハ器財を云ふハ万葉三二詠不盡山歌七
日本之山跡國乃鎮十方座神可聞寶十方成有山可聞
五ハ銀母金母玉母奈尔世武尔麻佐礼留多可良古
尔斯迦米夜母又三世人羨慕七種之寶毛我波何爲九
和我中能産礼出有白玉之吾子古日者十六ハ蟻衣
之寶之子等蚊十八ハ小多豆麻豆都流御調寶波可蕪

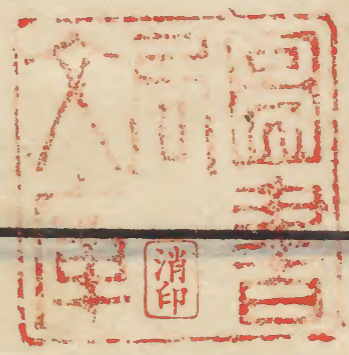
倍衣受都久思毛可祢都之有て右の如く人をも又
諸物をも云りハ借此小浮寶と詔給へるも其意ハ海
上小浮ハく物を運輸ハと以て寶と爲させ給へる由
小て寶小雅びたる御事ありハ崇神天皇十七年御
紀小詔曰船者天下之要用也今海邊之民由無船甚苦若
歩運其令諸國俾造船船と有る大御命も此小甚能似
たる事あり私記小要用を年祢津毛乃と有ハ宗津物ハ
の謂ハて此小浮寶と美称へさせ給へる其寶の言小其義亦同
ト者あり故纂疏小浮寶言輕財也母浮干水也と見ハ比有ハ就テ通證
小今按專指船而言蓋韓國有金銀則宜常往來以資國

用故不可無船材之意也此神功皇后御紀神教之起本
而所謂求財寶國者是也と云るハ然る言あり但浮寶
を輕財と云ひ又船材に云るハ非る可一其輕財以
て造りたる船即浮寶なる事上小己小注るか如く右
誤説ハ白井宗因が言小浮寶とハ木を云ふ金銀の類
をバ沉寶と云ひ木をハ浮寶と云事古來の詞なり
今の郷談小も良材を持をバ浮徳を持と云事なりと
云る小欺りなり者なりけり金銀を沉寶と云事
何れの書小も見ざり事なり崇神天皇六十年御紀小
鏡の事を底寶御寶主と云事有りも其も浮寶の
對小ハ非ず至り極めて貴き○不有ハ今迄海船の制
無か故小宣へり其ハ八洲起元章小天浮橋と云有り
天磐船と同物なり天上より昇降せ給ふ皇神等

の御船なりと雖も人間の用小ハ非ず又其第一二書
小蛭兒を便載葦船而流之と云ひ四神出生章小載之
於天磐椽樟船順風流棄と見え其第二一書小次生鳥
磐椽樟船輒以此船載蛭兒順流放棄と云事有れども
其ハ蛭兒を人休しカマハて不具ふる神カマハと已く思誤れる
小出たる事少く更小由無事傳七五十八六十九十
丁小注るか如く又古事記小も水蛭子を此子者入葦
船而流去と云て次小既生國竟更生神有が中小次
生神名鳥之石楠船神亦名天鳥船と見えたれども其
椽樟ハ此小素戔鳴大神の御眉毛より始て化れる物

しして其より上世ハ絶小世小無と事云も更ふれ
ハ傳の誤る事論を待ず第四一書小是時素戔嗚尊
帥其子五十猛神降到於新羅國居曾尸茂梨之處乃興
言曰此地吾不欲居遂以埴土作舟乘之東渡と見えだ
るハ今度の御事ふふ未木船を作る事非りけむが
故小埴舟を以て乘渡せ給へる上ハ其より以前小
磐楳樟船と云物木より絶て世小有まりけり理
ふる者をや備此小不有浮寶者未是佳也と詔給へる
ハ今埴舟小乘渡せ給ふと雖も此ハ天地の内を御
心小任せて往來給ふ大神等の御上小ころハ尤も右

も乘渡せ給ふ可きれ更小人間の用小非る事ふ
るか故小此小於て浮寶の事をし如此く思ひ寄
せ給ふ御事ありけり故此小不有浮寶の不有の言小
ころハ伺奉る事ありけりハ深意有て詔給へる御言と
唯虚詞との軽く見べりけり○未是佳也ハ本小余
訶良受登詔給比氏と訓り記傳四三十小彼女女人先言
不良の不良を余訶良受とし訓べくして其證小引れ
たる垂仁天皇二十八年御紀小非良ヨカラスと見え續紀第七
詔小天下君坐而年緒長久皇后不坐事母一豆善有
良行在と有と鈴屋大人の解小余訶良奴ハ余久阿
良奴の切りたるあり故有字を書り」と云れたるが如



し 儲此小余訶良自と詔^給へりハ今現小不佳と云小ハ
 非^{ユクヌエ}ず將來の佳^{ヨク}りるより事小係たる御言ふるが故
 小未字を受と訓ずりて自と唱ふる心實^{マコト}に習有る
 訓るりける然る小此の佳ハ常^{ヨキヨク}不佳と云とハ別
 めて神武天皇戊午年御紀小利害を余依阿志佐と訓
 る其少^{オホ}て推古天皇二十年御紀小^則為國有利何空之并^并
 海島耶孝徳天皇元年御紀小其園池水陸之利與百姓
 俱と有る久煩佐の事少^{オホ}て未是佳也ハ未是利也の義
 るる事知るれたり上より韓郷之島是有金銀若使吾
 兒所御之國不有浮寶者未是佳也と云下せらるを以て

明治七年七月廿二日校合 菅文支

